

の(足)を
の(ば)せ



福崎町

民俗学者・柳田國男の生家や姫路藩の大庄屋を務めた三木家の屋敷などが残ります。



市川町

播磨富士と呼ばれる笠形山を有し、自然が美しいまち。県指定無形文化財の獅子舞が今に伝わります。



神河町

西日本では有数の約90haにおよぶスキの大草原が広がる砥峰高原などがあります。



朝来市

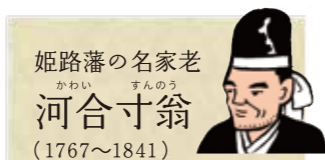
織田、豊臣、徳川の直轄鉱山として栄え、明治時代にはわが国最初の官営鉱山となった生野銀山跡があります。



銀の馬車道
日本初の高速産業道路

明治時代になると、近代化を推し進めるため、政府は生野銀山における銀の増産を計画しました。しかし、当時の銀を運ぶための道は細く曲がりくねった小さな街道だけ。そこで、明治6年(1873)、フランスから招いたレオン・シスレーを技師長として馬車道の工事を始めました。明治9年(1876)、天候に左右されずに馬車が通行できる約49kmの堅固な道「生野鉱山寮馬車道」が完成。当時は頻りに馬車が行き交い、沿線は大いににぎわったといひます。

『播磨国風土記』の
胄丘の伝説が残る
北部



姫路藩の名家老
河合寸翁
(1767~1841)

文化年間(1804年~1818年)、姫路藩の財政窮乏は深刻になり、藩主・酒井忠道は河合寸翁(道臣)に藩政改革の一切を委任しました。河合寸翁は木綿の専売制などで藩の財政を立て直しますが、その改革の一環として、文化8年(1811)に西光寺野台地で朝鮮人參の栽培を始め、人參役所が設けられました。また、天保元年(1830)には、藩製口ソクを作るため市川沿いにはげの木を植えたといわれ、その名残の木が現在も残っています。



▲今も市川沿いに残るはげの木



▲人參役所跡



▲馬車道修築の碑



但馬道
(生野道・馬車道)

『播磨国風土記』蔭山の里の条には、伊与都比古の神が宇知賀久牟豊富命と闘ったときに胄が落ちたことからその名がついたという「胄岡」の記述があり、甲山がその比定地。山頂にある甲八幡神社は豊富地区を中心とする地域の総鎮守で、品太天皇(応神天皇)を祭っています。



▲甲八幡神社

◀圓通寺の裏手には、『太平記』の逸話として高師直に追われた塩冶高貞の妻が自害し、火を放った小堂(焚堂)があったと伝えられ、現在は「蔭山焚堂早田妙応夫人の碑」が残ります。

南部
由緒正しい
寺社仏閣が残る



旅人 5
貝原益軒
(1630~1714)
儒学者・教育家・本草学者
黒田家の播磨時代を詳しく調査して『黒田家譜』を完成させた益軒。地理、歴史、産業、自然景観、考古遺跡を叙述するスタイルの紀行文を多く残しました。



▲亀山本徳寺

手柄には「亀山の御坊さん」と親しまれる亀山本徳寺や、神功皇后の三韓遠征の際、麻生山から放たれた事始めの三本の矢のうちの 하나가落ちたといわれる生矢神社などがあります。姫路城主・本多政武(忠国)が姫路城の裏鬼門を守るため創建した青山神社も、『播磨国風土記』の胄丘の比定地の一つです。馬車道の終着点である飾磨港には、赤レンガ造りの倉庫が残ります。



▲生矢神社



▲青山神社



▲亀山本徳寺



生野銀山から飾磨までを結んだ、馬車道の荷卸し設備である飾磨津物揚場跡。馬車道の工事に携わったレオン・シスレーが設計したと伝えられます。

近代化。
富国への道。

飾磨から姫路城下を通って香寺町へ。風土記の丘を訪ねたり、河合寸翁の財政改革や明治時代の殖産興業の名残を感じたり歴史あふれる但馬道を歩いてみましょう。